

写真記録の活用における保育の質の向上への取り組み

Survey on efforts to improve the quality of childhood education and care in
utilizing photo records

	松	延	毅
和洋女子大学	田	島	大 輔
ふたば保育園	吉	田	茂
ふたば保育園	佐	藤	陽 子
野中こども園	中	村	章 啓
こどもなーと保育園	和	泉	誠

要 旨

本研究は、写真記録に関する各園の取り組みを調査することにより、多様な写真記録のあり方を探り、それらが保育の質の向上にどのように寄与しようとしているのかについて明らかにすることを目的とする。写真記録を活用している保育者等は、所属する施設の状況に応じて定期的に写真記録を作成し、保護者や保育者、子ども等に対して共有し、それらを用いて子どもの育ちを示したり園内研修を行ったりするなど多面的に活用していることが窺えた。子ども理解の深まりや保護者の協力などに関して保育の質の向上に関連していると感じていることも明らかとなった。

1. 問題と目的

昨今、乳幼児期の保育や教育への関心は高まりをみせており、乳幼児期の保育や教育の効果や求められる要素について、エビデンスをもって語られるようになっている（OECD 2015、ヘックマン 2015）。そのような科学的根拠に基づき、かつ社会の変化に応じて、国内では平成 30 年に保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改定（訂）された。

改訂された保育所保育指針等では、乳幼児期に育みたい 3 つの資質・能力が示されたほか、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として 5 領域に基づいた 10 の項目が統一した表現で示されており、施設の類型に問わず、乳幼児期の子どもたちの育ちを保障することの重要性が改めて示されている。そしてその育ちは、子どもたちの姿に応じた豊かな保育環境のなかで、子どもたちの主体的な遊びを通して育んでいくことも示され、保育者においてはその専門性の向上と子どもたちの育ちを適切に見取っていくことの重要性も示さ

れている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2018）では、保育や教育の評価の妥当性や信頼性の確保について「評価や信頼性が高められるよう、例えば、園児一人一人のよさや可能性などを把握するために、日々の記録やエピソード、写真などの園児の評価の参考となる情報を生かしながら評価を行ったり、複数の保育教諭等職員で、それぞれの判断の根拠となっている考え方をつき合わせながら園児のよさを捉えたりして、より多面的に園児を捉える工夫をする」と示されており、子どもたちの育ちを捉える一つの方法として写真を活用することも挙げている。

写真を用いた記録については近年、その取り組みが全国の保育・幼児教育施設において盛んになっている。例としてはドキュメンテーション、ポートフォリオ、ラーニング・ストーリー（以下、総称として「写真記録」とする）などがある。北欧のスウェーデンでは、就学前教育の子どもたちが生活や身近な事象からテーマを取り上げ、それを子どもと保育者が一緒に自由な方法で探求したり、描画や造形表現、ファンタジーの遊びなどへ発展させていく「テーマ活動」や「プロジェクト活動」と呼ばれる活動を実施するプロセスを、保育者が子どもの言葉を書き留めたり活動の様子を写真に撮ったりして記録し、省察を添えて「ドキュメンテーション」を作成している。そしてその作成の目的として、子どもの学びのプロセスを子ども自身にも保護者にも保育者にも明確にすること（可視化）や、保育実践の改善や向上としている。

写真記録によって保育が可視化されることの特性について、岩田ら（2018）は①「子どものおもしろさに気づくこと」②「『これまでとこれから』が見えてくること」③「『おもしろさ』の発見から『共に味わう』こと」の3点をあげている。子どもたちの主体的な遊びのなかにある育ちを可視化することの難しさに対して、写真を活用した記録は子どもの姿を静止画で記録することができ、写真のもつ情報から、子どもたちの興味関心の要素を捉えやすく、共感を伴って子どもの姿に保育者として関心を寄せやすくなることが考えられる。同時に育ちのこれまでのプロセスを概観することが可能になったり、そこから予想される子どもの姿を描きやすくなるようである。同時に写真記録を保育者などの職員間で共有することは、子どもを支える立場の人間関係の構築にも関連づいていく。

ひとえに写真記録といっても各園それぞれ工夫を凝らすなど実際には様々なものがあり、それらは各園により様々な目的のもと作成されていると考えられる。園によって違いが見られるのは記録を取ることが目的ではなく、写真記録を誰と共有し、何を目的に作るかということに重要性をおいていることが理由と考えられる。それは先述した保育や教育の評価の妥当性や信頼性を担保することになるだけでなく、自分たちの保育の質の向上に関連づくものであると考えることができる。

写真記録は子ども・保護者・保育者のどの対象にも可視化の可能性が多様に開かれているといえよう。前述したように、実際、各園の写真記録はそれぞれ様々な目的があり、様々

なかたちとして取り組みが行われていると考えられる。しかしながら、これまで各園で行われている写真記録の取り組みの実態を、その対象や目的など踏まえ調査した研究は管見の限りであるが多くない。そこで本研究は、これら写真記録に関する各園の取り組みを調査することにより、多様な写真記録のあり方を探り、それらが保育の質の向上に、どのように寄与しようとしているのかについて明らかにすることを目的とする。

なお、本研究における写真記録は写真を用いて保育の記録を作成したもののを定義とする。

2. 研究方法

写真記録の活用に基づいた保育の質の向上についての実態を明らかにするために、質問紙調査を実施した。調査はオンラインの調査用質問フォームを作成し、全国の87か所の保育所、幼稚園、認定こども園の保育者等に回答を依頼した。

調査は2019年4月から5月に実施し、調査で得られた311件の結果を基に、写真記録の取り組みの実態を整理し、写真記録の活用方法を概観する。また写真記録の活用事例についてもテキストマイニングによる分析と事例を検討し、それらから写真記録の活用の実態を明らかにするとともに、保育の質の向上にどのように寄与しているかについて考察を行った。

表1 質問フォームの各質問

質問番号	質問内容
1	施設種別
2	施設定員
3	回答者の職種・役職等
4	保育記録の中で「写真」を活用の有無について
5	写真記録の主体者について
6-1	写真記録の共有範囲について
6-2	共有の優先順位について
7	写真記録の活用方法について
8-1	写真記録と保育の質の向上について
8-2	写真記録が向上させる保育の質について
9-1	具体的な様式・作成頻度・名称・共有の方法について
9-2	具体的な保育への活用方法について
9-3	写真記録の課題や今後の見通しなど

3. 結果と考察

1) アンケート調査の結果

まず、今回の調査で得られた回答者の所属を図1に示す。

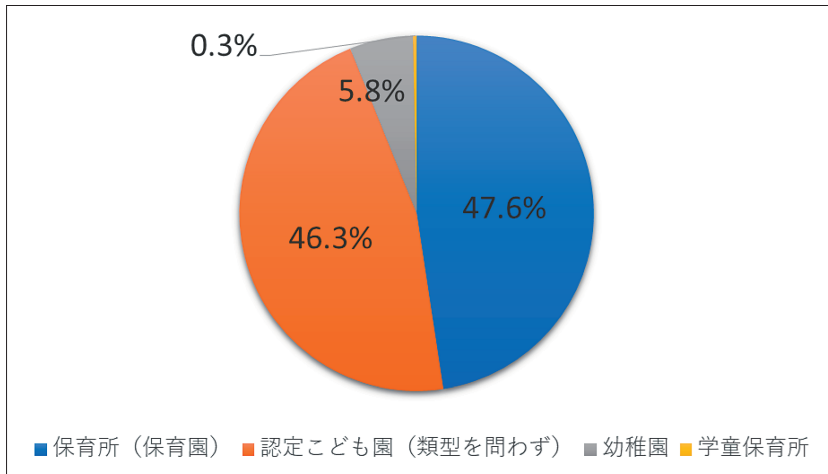


図1 回答者の所属

アンケート調査で得た311の回答のうち、47.6%となる148名は保育所の所属、類型を問わず認定こども園の所属は144名となり、全体の46.3%を占めている。また幼稚園の所属は18名、その他、学童保育所に勤務する者が1名であった。

続いて、回答者の在籍する施設の規模を示す施設定員の内訳を図2に示す。

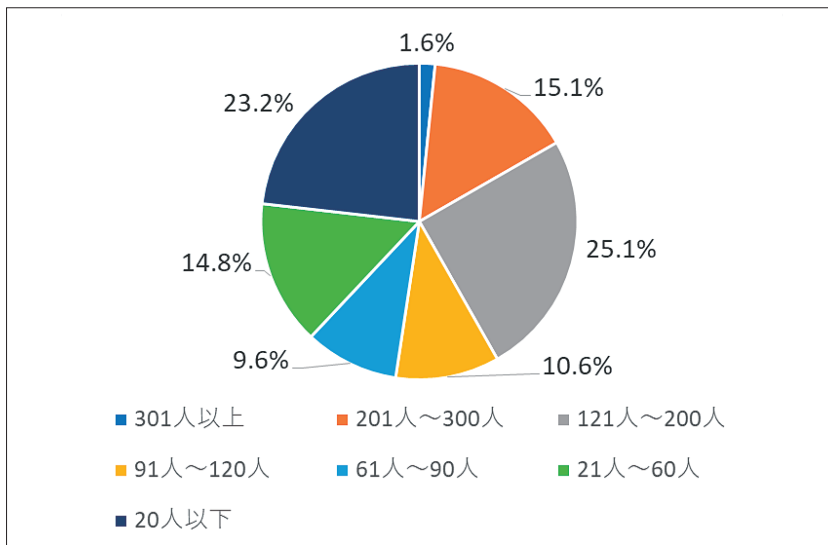


図2 回答者の所属する施設の定員

回答者の所属する施設の規模を示す施設定員は、20 名以下が 23.2%、21 名から 60 名までが 14.8%、61 名から 90 名までが 9.6%、91 名から 120 名までが 10.6%、121 名から 200 名までが 25.1%、201 名から 300 名までが 15.1%、301 名以上が 1.6% であった。

次に、回答者の役職を図 3 に示す。

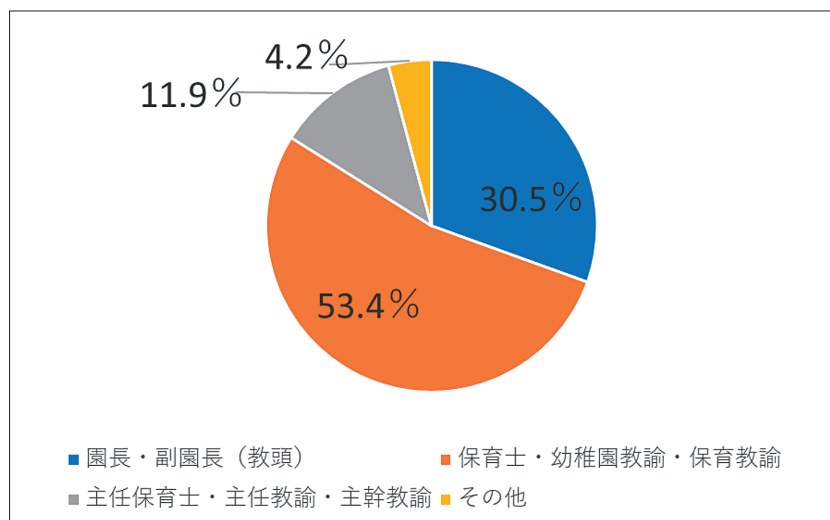


図3 回答者の役職

311 件の回答者の役職で最も多かったのは、全体の 53.4% を占めた保育士や幼稚園教諭、保育教諭、保育教諭であり、クラス担任をするなど日常的に子どもに関わる立場にある役職であった。続いて園長や副園長などが 30.5%、主任保育士や主任教諭、主幹保育教諭などが 11.9% であった。その他には、栄養士や保育補助者のほか、施設内で子どもと造形を行う通称「アトリエスタ」などと呼ばれる役職も含まれた。

続いて、保育において写真記録の活用の有無を図 4 に示す。

施設の保育における写真記録の活用については、89.4% が活用していると答え、多くの施設で保育における写真記録が活用されていることが明らかとなった。

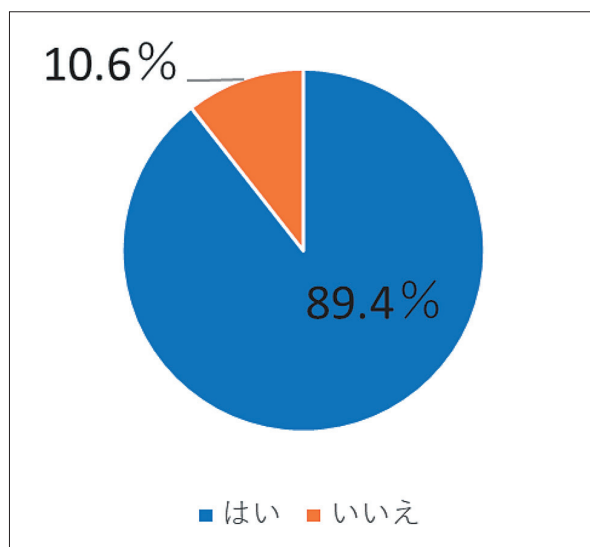


図4 保育において写真記録の活用の有無

写真記録を活用している施設の中で、写真記録の主体者について図5に示す。

写真記録を活用している施設の写真記録の主体者は、クラス担任の保育者が最も多く、次いでクラス担任以外の保育者も保育中に写真を撮影して記録していることがわかった。

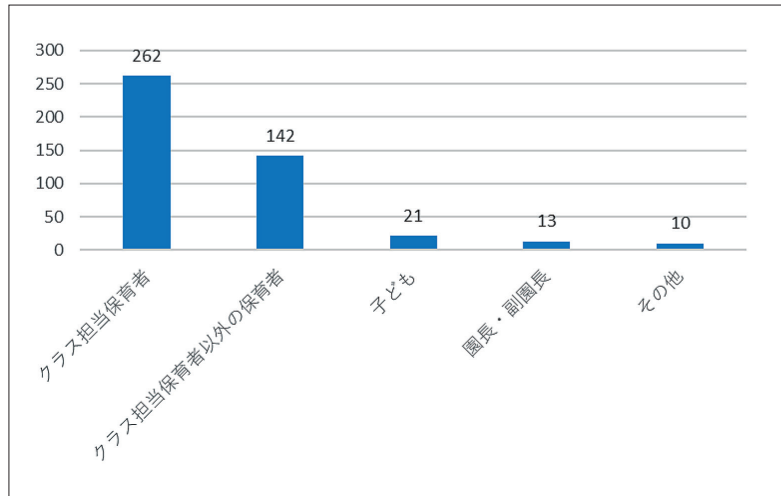


図5 写真記録の主体者（複数回答）

また園長や副園長が記録することもあるほか、園で生活している子どもが自分たちの園生活の写真を撮影していることもある様子がうかがえた。クラス担任以外の職員も写真記録の主体者となっている施設がある点については保育が客観的あるいは俯瞰的に記録することが期待でき、記録をクラス担任などと共有することで、より多角的に保育や子どもの育ちを捉えることが可能になると考えることができる。また写真記録の活用を始めたばかりの施設ではリーダーとなる園長などがモデルとして写真記録の作成をすることで他の職員に周知したり取り組みを促したりしたりすることが考えられる。

続いて、写真記録の共有範囲について、図6に示す。

撮影された写真を用いた記録は、保護者に向けて共有することが最も多く、さらに共に保育を行う施設内の保育者や保育対象である子どもたちにも写真記録を公開し、共有化を図っていることが明らかとなった。また施設の置かれている地域に写真記録を公開していることもあり、地域に対して自園の保育・教育活動の情報を発信している様子が窺える。

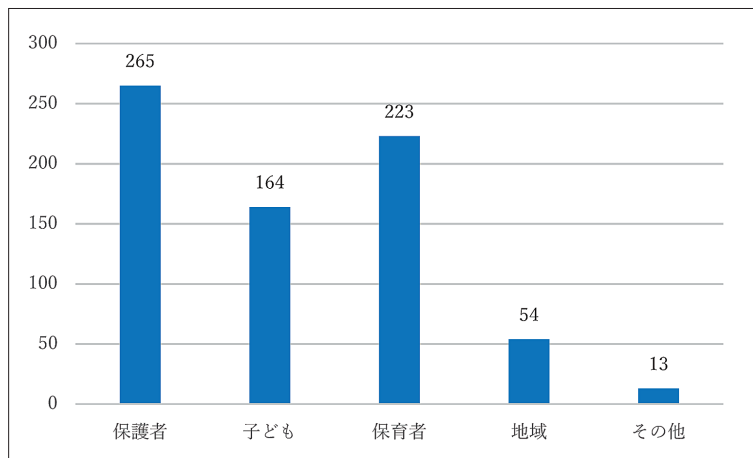


図6 写真記録の共有範囲（複数回答）

続いて写真記録の公開でもっとも優先している対象について図7に示す。

図6より、作成される写真記録は保護者や保育者、子ども、地域などに公開されていることが明らかとなった。さらにその公開対象のなかで、もっとも優先されているのは保護者であることが図7の結果から明らかとなった。施設として、預かる子どもの養護と教育を担うため、その保護者に対して子どもの育

ちを最も伝えるべきと考えていることが窺える。一方でわずかではあるが公開対象に優先度をつけないと考えている回答者も見られた。

続けて写真記録の活用方法を図8に示す。

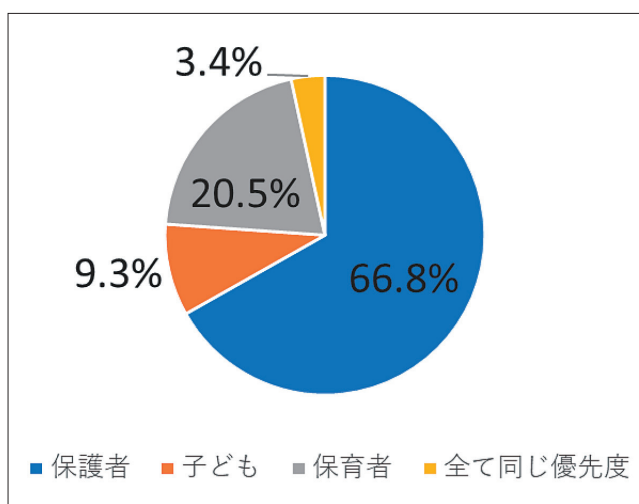


図7 写真記録の公開の第1優先対象

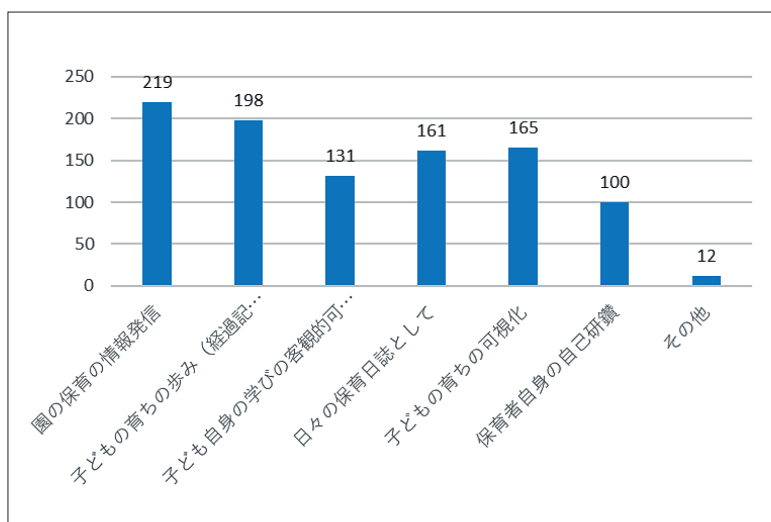


図8 写真記録の活用方法（複数回答）

写真記録の活用方法としては、「園の保育の情報発信」として活用されていることが最も多い。また「子どもの育ちの歩み（経過記録）」、「日々の保育日誌として」「子どもの育ちの可視化」などの活用をしていることも多く見られた。さらには、子どもたち自身が自分の育ちを捉えるために活用していることや、保育者の自己研鑽のために写真記録が活用

されていることも明らかとなり、写真記録には幅広い活用の用途があることが窺える。

写真記録の活用が保育の質の向上につながっているのかについての回答を図9に示す。

写真記録の活用と保育の質の向上との関連については96.8%が、保育の質の向上につながっていると感じており、3.2%は保育の質の向上につながっていないと感じている。

この点について、どのような保育の質に関連づいたと感じているかについて図10に示す。

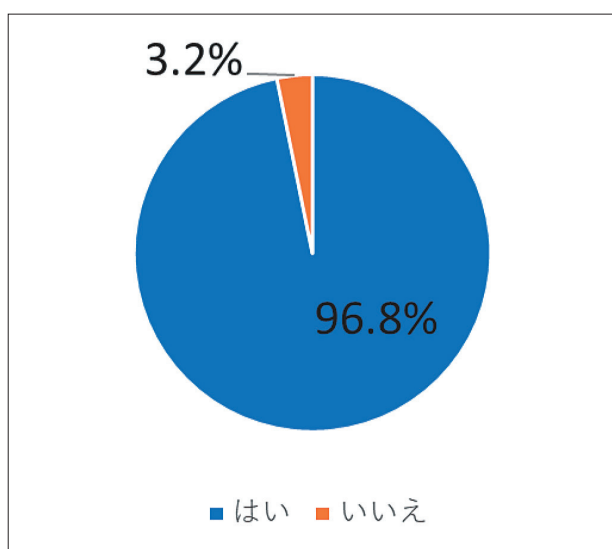


図9 写真記録の活用と保育の質の向上の関連性の実感

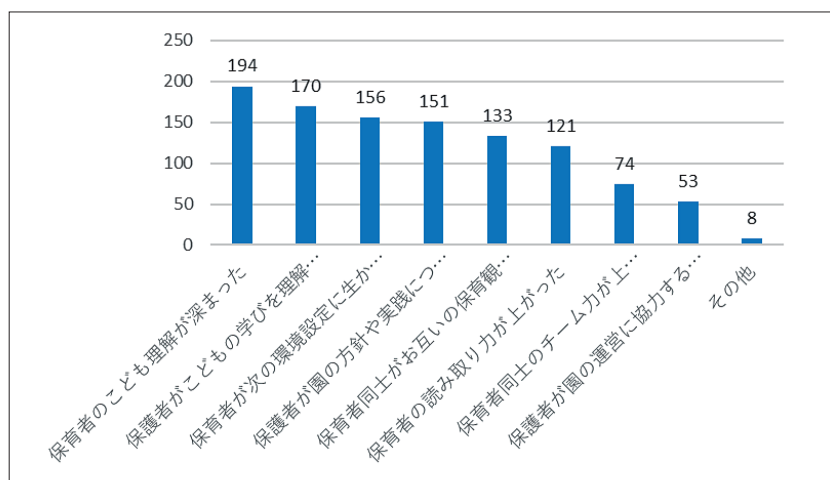


図10 写真記録の活用と保育の質の向上との関連

調査の結果、保育者が子ども理解を深めることができていることや、それによりその後の保育の保育環境を検討することに活用されている点、保育者同士が保育観などを共有したり、関係性が向上した点などを感じていることが明らかになった。また写真記録を公開している保護者にその施設の保育教育活動について理解してもらえたり、保護者の協力を得ることにつながったりしたと感じていることも明らかとなった。

OECD（秋田ら、2016）は保育の質の側面として、政治や自治体を示す方向性や法律な

どである、「志向性の質」、物的や人的環境の全体的な構造を指す「構造の質」、ナショナルカリキュラムなどで示される教育や保育の概念や実践などを示す「教育の概念と実践」、保育者と子どもたち同士、保育者同士の関係性などを示す、「相互作用あるいはプロセスの質」、効果的なチーム形成のための運営や保育計画、専門性向上のための研修機会の参加、実践の観察や省察、評価などの確保や、柔軟の時間配分などを示す「実施運営の質」、現在の、そして未来の子どもたちの幸せ（well-being）につながる成果を示す、「子どもの成果の質」を挙げている。そのなかで、「相互作用あるいはプロセスの質」と「実施運営の質」において写真記録の活用は保育者の子ども理解の向上に関連づいたり保育者同士の関係性や自己研鑽につながったりしているという結果から、それらの側面の質の向上に寄与していると考えることができる。

2) 写真記録の具体的な取り組み

表2は、質問項目の9－1の写真記録の具体的な作成方法などについて得た記述式の回答をまとめたものである。

表2 具体的な様式・作成頻度・名称・共有の方法について

様 式	・ A 4、A 3などの用紙を使用する。 ・ 作成枚数は園で1枚や学年、クラス毎に1枚～複数枚。 ・ 手書きまたは、パソコン・タブレット等で作成 ・ 使用する写真は写真記録のレイアウトに応じて1枚～複数枚。 ・ 短文の説明文、エピソードなどを加える場合もある。	
作成頻度	・ 毎日作成 ・ 月に1回～複数回	・ 週1～2回程度 ・ 行事ごと
名 称	・ 「ドキュメンテーション」 ・ 「ドキュメントペーパー」	・ 「ポートフォリオ」 ・ 「個人ペーパー」
共有方法	・ 園内掲示板や園内設置モニター ・ 施設のホームページ ・ 紙媒体の配布 ・ 園だよりでの掲載 ・ 専用ファイルに綴じて各家庭とやりとりをする ・ シール帳などに添付 ・ Facebook や LINE などのソーシャルネットワークサービス ・ 保育支援アプリ ・ 職員の研修資料への添付 ・ 保育計画への添付	

写真記録の作成方法や様式、共有方法は各施設の実情に合わせて、多様性があることが窺えた。記録の共有方法についても、紙媒体を掲示や配布するだけでなく、デジタル機器やソーシャルメディアを活用している施設も複数見られた。これらの点については、写真記録はデジタルカメラなどで撮影した写真を使用して、パソコンやタブレットなどの機器を使用して作成することが多くある背景から、印刷だけでなく、写真記録のデータをそのままデジタル機器に使用することで円滑な情報の共有化を図っていることが窺える。また、施設に直接足を運べない保護者に対しても教育や保育の取り組みを示し、子どもの育ちを共有することが可能になるため、活用していることが考えられる。

続いて、写真記録の具体的な活用方法に関する自由記述をテキストマイニングにより分析し、抽出された語句の関連付けを行った。その結果を図11に示す。

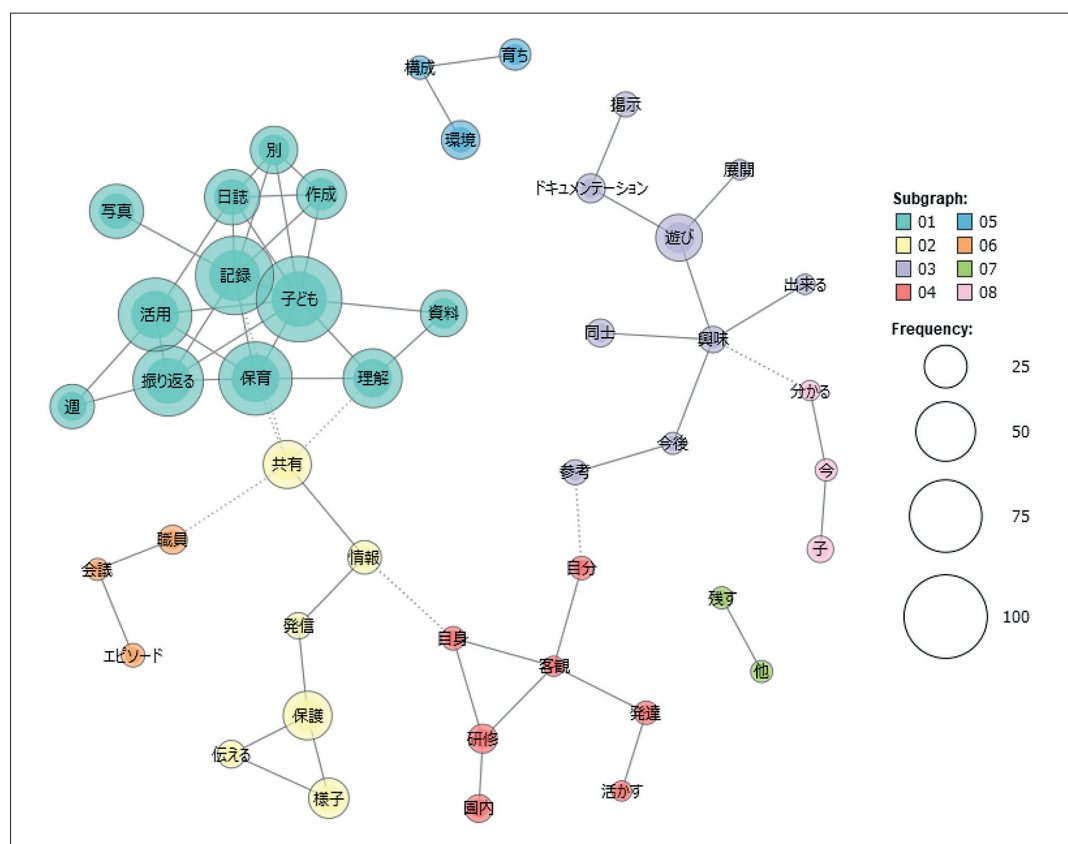


図11 写真記録の活用方法の抽出語の共起ネットワーク

写真記録を保育日誌として活用し、保育を振り返ったり、子ども理解の資料としている様子が窺える。記述の中では日々の保育日誌とは別に写真記録を作成している場合もあることも明らかとなった。また写真記録は保護者や職員とも共有されており、職員の園内研

修などでは保育を客観的に捉えることで、子ども発達への理解に活用している様子が窺える。さらに写真記録から子どもたちの遊びの興味や関心を捉えてその後の保育に活かしたり、子ども同士が写真記録を見ることで遊びをさらに深めたりすることにも寄与している様子が見られた。

図12は写真記録に関する今後の課題などの自由記述をテキストマイニングによって分析し、抽出された語句を関連付けたものである。

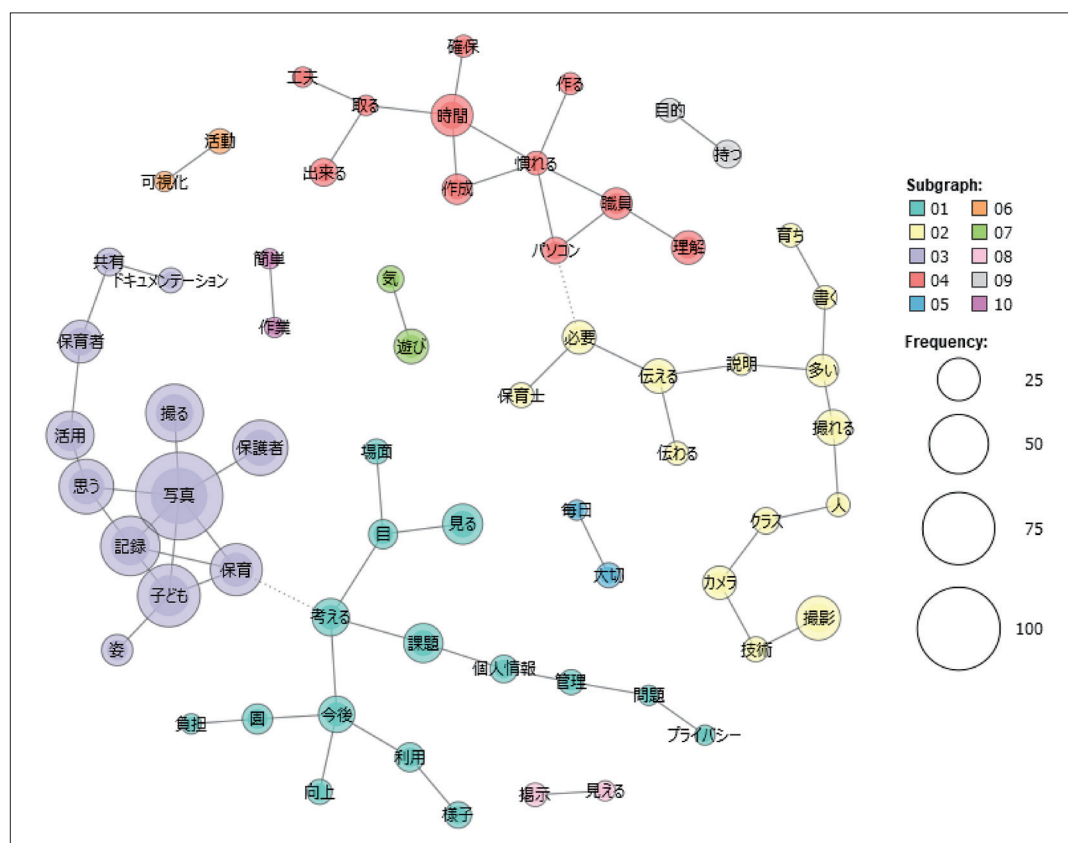


図12 写真記録の今後の課題の抽出語の共起ネットワーク

写真記録の今後の課題として、複数の視点があることが窺える。写真記録の活用を継続していく中で保育の質の更なる向上につなげようとする考えの姿がある一方、作成などの負担やカメラやパソコンの整備に関する費用の負担への課題意識も見られた。

作成に関する課題では、より写真記録を工夫していきたいと考える一方でパソコンなどの使用への慣れや作成する時間の捻出が課題となっていることが明らかとなった。作成作業が簡単になることを望んでいる様子も見られた。また作成に関連付けられる視点として写真撮影に関する点も課題と捉えていることが窺えた。記録したい場面でうまく撮影でき

ないことへの課題が挙がる一方、写真撮影ばかりに気をとられてしまい、保育行為が不十分になることへの危惧も窺えた。

日々の子どもたちの遊びに関しては写真記録で深めた子ども理解などを活用して、環境構成やかかわりに意識を向けようとする考えがあり、加えて保育者同士で保育や子どもの育ちを伝えあうことの必要性も感じている様子であった。

個人情報の取り扱いに関することはプライバシーの観点からも課題として考えている回答者が多く、情報管理や写真記録の公開の在り方については慎重な声も聞かれた。

最後に調査で得られた写真記録の活用の具体的な方法について、大分県のA保育園の取り組みを事例として紹介する。

－ A 保育園での取り組み－

(1) 保護者や子どもへの情報発信「ドキュメンテーション(遊びの中の学びの物語)」

保護者発信の強化、また保育者の読み取り力の向上を目指し、日々撮影している写真を、園で使用しているタブレットやスマートフォンのフリーアプリを利用して、ドキュメンテーションを作成し、それを園内に掲示するという取り組みをはじめた。保育者はアプリを起動し、写真の使用枚数に合わせたフレーム(枠)を選び、そこに写真と子どもの遊びのエピソードや保育者の視点などテキストを打ち、適当な場所に挿入する。それを Wi-Fi でつながっている園内のコピー機から印刷し、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」や「5 領域」、「3つの視点(乳児)」、「遊びの中の学びを見る5つの視点(興味、関心等)」の項目の入った台紙に貼り付けて掲示するというものである。朝夕、保護者と子どもが自分や友達のドキュメンテーションを見たり読んだりする姿が見られている。

(2) 保育者の園内研修への活用「わたしのカンファレンス」

「わたしのカンファレンス」(以下、職員間での呼称、「わたカン」とする)とは、子どもが遊ぶ中で興味や関心に惹かれていたり、夢中になっている場面で保育者が「いいね」と感じた場面を写真に撮り、その写真を遊びのエピソードも交えて毎月行われる職員会議にて、パワーポイントを使用して発表するというものである。パワーポイントは、タイトルスライド、写真スライドを3ページ、合計4ページ以内にまとめる。この「わたカン」の場では、保育者同士の笑顔が絶えない。子どもの遊びの様子を保育者同士が微笑ましく見合うことで、得てして張り詰めることの多い会議の場を和ませ、さらにそれぞれの保育観を知ったり、互いの保育を認め合ったり、また子どもを肯定的に捉える保育者集団としての目を育むことなどを目指して取り組んでいる。

（３）『『いいね』写真を保護者専用ページに掲載』

前述したように、保育者は毎日子どもが遊ぶ中で「いいね」と感じた場面を写真に撮っている。基本的にその日登園した全ての子どもの遊ぶ姿などを１枚～数枚撮っている。これを「わたカン」で使用するだけでなく、当園ホームページの保護者専用ページ内で毎日、全ての子どもの写真を掲載している。

保育者は夕方までに子どもの写真と今日あったこと（これはクラス単位だが）を園内のアドレスにメール送信。それを受けて、担当者がパソコンで保護者専用ページに掲載する作業をする（所要約１０分）。クラウドを利用したこのシステムは、業者に依頼し、作ってもらった。この取り組みは、日々の子どもの遊びの様子を保護者へ発信し、例えば夕食の懇談時、「こんな遊びしたのね。」などと写真を見合いながら家庭で親子の会話のたねにして欲しい、そして３歳以上児は言葉をより一層使う機会にして欲しいなどと願ってはじめた。また、特に３歳以上児は日々の連絡ノートがないため、ノートの代わりに日々の様子を伝えるツールとしたいなどといった目的で行っている。

A 保育園では写真記録を保護者と子どもに向けて公開し、保護者に対しては園の保育内容の理解を促すと同時に子どもの育ちを共有している。また子どももその写真記録を保護者と一緒に見ることで、子どもの内面的には自分の園生活を捉え直し、自分の遊びを再認識することに繋がっているようである。それらの経験は翌日の園生活において子どもが主体的に過ごす姿に関連づいていくと考えられる。また保護者に対して自分の遊びや生活を言葉や仕草を用いて伝えることで親子の対話を生み出し、園生活と家庭での生活に緩やかな接続が生まれていることが考えられる。

またA 保育園では園内研修用の写真記録のフォーム（型）を整えることで職員が研修に向けて自分の視点を捉えやすくする工夫が窺え、このような写真記録の活用法は研修の効果を高めることに起因することも考えられる。

これら点については職員が扱いやすいレイアウトや可能な限り簡単に作成できるように機器やシステムを整えることで作業効率が上がり写真記録の活用の効果がより高まっていくのではないかと考えられる。

４．総合考察

今回の調査では写真記録の活用の多面性を概観することができた。一つの写真記録が保護者や地域に向けて子どもの育ちや学びの情報発信となるだけでなく、保育対象である子どもや保育者などに対しても活用できることが明らかとなった。保護者が園の保育や教育を理解することは、子どもの育ちを共有し喜び合える関係性となり、園や保育者などへの

信頼感が生まれていく。保育者にとっては写真記録の活用によって子ども理解をより深めたり自己研鑽することで、保育環境や遊びの援助を考えていくことになり、その結果子どもたちにとって、より豊かな保育環境が整備されて、子どもたちも写真記録により可視化された自分の姿を見たり感じたりすることで自分の遊びの意味を考えたり新しい発想にいたり、遊びが発展したり深まったりし、好循環を形成していくことも考えられる。つまり保護者の理解や保育者の専門性の向上、保育環境などの深まり、子ども自身の主体性などは保育の質の向上において重要と考えられている各側面であり、写真記録がそれぞれの側面で有効に作用することが考えられ、それらによって保育者などが実感している保育の質の向上との関連性に起因していると考えられる。

一方で、写真記録については作成時間の捻出や写真撮影の視点、保育者の保育行為や援助とのバランス、煩雑な機器の操作への負担などの課題も浮き彫りとなった。

保育の質の向上を図って写真記録を活用していく中で、上記の課題には保育の質を低下させたり保育者の負担の増加による疲弊を引き越しかねないものであると考えられる。これらの課題に関しては既存の業務内容を見直したり、ノンコンタクトタイムなどのように事務作業の時間をきちんと確保することなども必要となる場合もある。また保育者が写真記録を作成しやすいようなシステムやひな形なども必要に応じて整えることで作成者の負担を軽減し、保育の質の向上に関連づく写真記録の活用がなされていくであろうと考える。

今回の調査では、写真記録の活用の全体像をとらえることに終始した。今後の課題として細かな作成方法の違いや共有範囲の違いによる写真記録の活用の効果などは明らかにすることができなかった。また写真記録を活用し始めたばかりの施設や写真記録を活用していない施設などについても、丁寧な検証が必要である。

文 献

- ・ OECD 2015 Starting Strong IV: Monitoring quality in early childhood education and care. Paris: OECD Publishing
- ・ ジェームス・J・ヘックマン著 古草秀子訳 2015 幼児教育の経済学 東洋経済新報社
- ・ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 2018 内閣府 厚生労働省 文部科学省
- ・ 岩田恵子 大豆生田啓友 2018 保育の可視化へのプロセス 玉川大学学術研究所紀要 第24号 1-13
- ・ 秋田喜代美・淀川裕美訳 2016「保育プロセスの質」評価スケール：乳幼児期の「ともに考え、深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」を捉えるために 明石書店